

春の日を愛でる言葉「菅の根」
『万葉集』における動詞「こひわたる」と助詞「を」の働きに関する一考察

For the love of a fine spring day – Reflection on the use of *wo* in the expression *wo koi-wataru* –

ジュリー・ブロック Julie Brock

京都工芸繊維大学 基盤科学系
Department of Arts and Sciences
Kyoto Institute of Technology
E-mail: brock@kit.ac.jp

（2015年3月10日原稿受理、2016年2月3日採用決定）

要 約

『万葉集』に見られる以下の和歌をフランス語に翻訳することを試みた際、動詞表現「孤悲わたる」の部分に関して問題が生じた。

おほほしく 君を相見て 菅の根の 長き春日を 孤悲わたるかも (10-1921)

「孤悲わたる」は「こふ」と「わたる」が合わさってできた複合動詞である。「孤悲わたる」の直前の助詞「を」は時間的狀況を表し、「君を」恋して「日を」過ごすという意味に解釈される。つまり、日本語では「こふ」の対象である「君」は言外に示されている。一方、フランス語では「こふ」に当たる動詞は他動詞であり、必ずその目的補語を明示しなければならない。従って、この和歌をフランス語に翻訳しようとする、代名詞「君」を動詞「こふ」の前に置くことで「君」が繰り返され、詩は平凡なものになってしまう。本考察では、より詩的な翻訳を試みて、「恋ひ暮らす」「思ひ暮らす」などを含む『万葉集』中の類似した例を三つとり上げ、それぞれの原文を三種類の現代語訳（中西進訳、1978年～1983年、小学館版の訳、1971年～1975年、折口信夫訳、1916年）を参照しつつ吟味した。こうした検討を経て、最終的に、詩的な観点からひとつのフランス語訳を導き出した。

キーワード：万葉集、翻訳学、孤悲わたる、思ひ暮らす、恋ひ暮らす、枕詞

SUMMARY

In poem n° 1921 in the *Man'yôshû*, we came across a difficulty in translating the verbal phrase *kohi-wataru*, “carry on loving”. This word, made up from *kohu* “to love” and *wataru* “to spend (one’s time), to go by (time), to carry on”, expresses the idea of continuity in love. It is preceded by the particle *wo*, which indicates the complement of time of the verb *wataru*. The phrase *hi wo kohi-wataru* therefore means “to continue loving all day long”. But the particle *wo* can equally indicate the function of the object. This is the case of the second occurrence of *wo* that we also find in our poem: *kimi wo aimite* “Seeing you, meeting you”. The poetess sings about the meeting with her lover and declares she will continue loving (him) all day long. In Japanese, the object of the verb “to love” is implicit, whereas it has to be explicit in French: “I shall continue loving *you*.” The structure of the French language leads us to a repetition that is not in the original – and thereby weakens the song. In order to imagine a more poetic translation, we shall look at three other poems in the *Man'yôshû* that include a similar verbal expression. By comparing the translations of these poems into modern Japanese, we can deepen our understanding of the meaning of the poem in the original. Such an approach will lead us to make a fundamental choice: that is, to translate the poem *poetically*.

Key words : Man'yôshû, translation studies, expression of love, pillow-word

万葉集における恋の詩をフランス語に翻訳する過程において、次の詩に文法的な問題が生じた。

おほほしく 君を相見て 菅の根の 長き春日を 孤悲わたるかも (10-1921)

問題を明確にするためにまず二つの仮の訳を以下に挙げる。

1) « Tout imprégnée de ton regard, je continue de t'aimer *tout au long de* cette journée de printemps, longue comme une longue racine de *suga*. »

「君の眼差しに浸されたので¹、長い菅の根のように長いこの春の日を、一日中君を恋い続けることでしよう。」

2) « Tout imprégnée de ton regard, je me consume d'amour *pour* cette journée de printemps, longue comme une longue racine de *suga*. »

「君の眼差しに浸されたので、長い菅の根のように長いこの春の日をずっと、恋焦がれていることでしよう。」

本論の目的は以上の二つの翻訳の妥当性を比較検討することである。どちらが良いかを議論するために、他のいくつかの万葉集の歌の分析にも立脚したいと思う。最終的にこの選択を決定する際、美学的な判断基準にも依拠するつもりである。

「こひわたる」の前にある助詞「を」

当該の歌において、第五句の動詞「こひわたる」の前にある助詞「を」にまず注目した。というのも、この歌を翻訳する際に難しいことは、「こひわたる」は「こふ」と「わたる」の複合語であり、フランス語ではそれを分解しなければならないことである。「恋い続ける」と翻訳することは可能であろう。しかしながら、問題はフランス語では「こふ」の目的補語を必ず (« *je continue de t'aimer* ») のように、少なくとも代名詞 « *t'* » の形で表現しなければならないところにある。もし日本語の原文では明示されていない「君を(こひわたる)」をフランス語で明示すると、「君」の繰り返しのために、日常の言葉のようになり、詩的な効果は弱くなってしまふ。詩的な効果を高めつつ訳すためには、この目的補語をどのように表現したらよいだろうか。

『角川古語辞典』と『日本語大辞典』の定義によれば、助詞「を」は「動詞の目的補語」を示すだけでなく、しばしば古典語においては「時間的継続を意味する自動詞を伴って経過する時間を示す」格助詞として使われる、ということである。従って、「こひわたる」の前の「を」を時間的な状況を示すものとして、「長い春の一日を渡る(過ごす)」と解釈することも妥当であると考えられる。しかしながら、フランス語において「恋をして一日を過ごす」または「一日中恋し続ける」といった目的補語を伴わない表現によって翻訳することは、不自然である²。

そこで、「こひわたる」の前にある助詞「を」について、果たして動詞「こふ」の目的補語を「春日(春日をこふ)」と解釈することはできるだろうか。これは日本語の観点からは不自然な解釈であるが、フランス語訳を試みる際に、フランス語文法の要請によって導かれるひとつの案として、ここに提示してみたい。

さて、第二句「君を相見て」では、特に「君を」によって、詠み手の女性の主体性が暗示される。この主体性は「君を見る」と同時に「君に見られる」ものであり³、歌の文章の中にこの主体性が表現されていないが、それだからこそ、この歌の主体は「君」の眼差しの源となり、「今、ここに」凝縮し、その存在を強く実感している。ところでフランス語の翻訳の中で「君」を敢えて繰り返せば、この歌の動力となって

いる主体性は弱まってしまふ。こうした考えから、この解釈に基づくことはせず、本考察ではその他の万葉集の構造の類似した歌を検討した後、当該の歌の翻訳の基準を決定することにしたい⁴。

本考察では、問題の歌の翻訳の準備として別の三首の歌を分析する。この三首には「思ひ暮らす」「恋ひ暮らす」といった類似表現が含まれている。分析の過程で、三つの歌を関連づけ一貫した全体をつくることを可能にし、その上問題の歌にも繋がるひとつの焦点を明らかにしたいと思う⁵。具体的な方法として、この三首の和歌を、原文の分析、さらにはその近現代日本語への翻訳（中西進氏、小学館、折口信夫）の比較をそれぞれ行いたいと思う。

第一の歌

「相不念 妹哉本名 菅根乃 長春日乎 念晩牟」（1934 番歌、作者未詳、卷十春相聞）

■中西進訳：「私を思ってくれないあの子を、ぼんやりと、菅の根のように長い春の一日中思いつつ暮らすのだろうか。」

« Cette fille qui n'a pas de bonté pour moi, est-ce que je vais continuer de penser à elle sans raison pendant toute cette journée de printemps, longue comme une racine de *suga* ? »

■小学館訳：「思ってもくれぬあの娘をやたらに（菅の根の）長い春日を思い暮らすことか」

« Vous qui ne m'aimez pas alors que je vous aime, croyez-vous que je vais passer cette journée de printemps, longue comme la racine de *suga*, à vous chérir en vain ? »

■折口信夫訳：「自分許りが片恋の、いとしい人に埒もなく焦がれて長い春の日を思い暮らしてをるべきであらうか。馬鹿なことだ。」

« Faut-il vraiment que je passe cette longue journée de printemps à aimer sans retour une chérie qui ne m'aime pas ? C'est idiot ! »

■訓読文：相思はぬ 妹をやもとな 菅の根の 長き春日を 思ひ暮らさむ

この原文を簡単に分析してみると、最初の動詞「相思ふ」が打ち消し「ず」の連体形「ぬ」によって直後に続く「妹」を修飾する形をとっており、仮に訳すと「私の恋に伝えてくれないあの娘」となるであろう。さらにこの「妹」という語には、助詞「を」が続き、この助詞は「思ふ」の目的補語を示すものである。しかしそれはまた詠嘆疑問の助詞「や」も伴っている。この部分を仮に訳せば「あの娘に恋するのだろうか。」となるであろう。

そのあとに、枕詞「菅の根」があり、慣用的にさらに「長き春日」が続いており、その「春日」の後にもう一度助詞「を」が現れる。ここでは、この助詞は動詞「暮らす」の時間的な状況を示しているに違い

ない。末尾の助動詞「む」は感情的推量を示しているので、全体の意味は「この菅の根のような長い春の日を、私の恋に応えてくれないあの娘をずっと恋し続けなければならないのだろうか」（« Devrais-je passer cette journée de printemps, longue comme une racine de suga, à aimer une fille qui ne m'aime pas ? »）となるであろう。

ここまでの段階では、「もとな」という語はまだ翻訳していない。簡単に調べたところ、この語には「根拠もなく」「理由もなく」という意味があり、また「しきりに」「やたらに」という意味もある⁷。この副詞は、詩の中で重要な働きをしているように感じられる。実のところ、日本語の三つの翻訳においては、何か物足りない所がある。それらの三つの翻訳においては、歌い手は自分の内面にしか向かっていないように感じられる。それは折口の翻訳に特に顕著である。彼はきっと歌い手の内奥を伝えようとして原文にない付け足しを行ってさえいる。「これは馬鹿なことだ」といったように。

ここで万葉集の相聞歌は、恋人へのメッセージとして創作されていたことを思い返さなければならない。そうした側面を考慮してこれらの翻訳を見た場合に困るのは、それらが歌い手の内面（歌い手の内面を想像する翻訳者の内面）にのみ集中していることで、歌を受ける女性へのこれらのメッセージが苦く、押し付けるような、あまり女性への敬意が感じられないことである。いずれにせよ、この三つの翻訳は、青木生子氏が考える、相手への思いやりから生じる関係性、相手への配慮、恋する相手への細やかな気配りといった恋の特徴⁸を伝えるにはあまり相応しくないように思われるのである。相手へ向けた心、つまり優しい気持ちこそが、これらの翻訳には見出せないのである。そのために、これらの翻訳者とは異なるより相応しいと思われる観点を求めるべきだと思う。

中西氏は、自らの翻訳に補足する形で、「もとな」という副詞が形容詞「もとなし」の短縮した形であると述べている⁹（『万葉集（二）』、中西進訳、p.327）。同様の解説は小学館版万葉集の中にも見出せる。そこから「もと」という単語の意味について考えてみたいと思う。まず「もと」は語源的には「根」あるいは「起源」を意味する。問題の歌では、さらに打ち消しの意味を示す形容詞「なし」が続いているので、その意味は「根がない」ということになるであろう。従ってこのモチーフを通じて表現されているのは、相手から思われないことに不安を感じているひとりの恋人である歌い手の不安定な心、その脆さ、抛り所のなさだと考えられる。そこから「もと」の意味する所は、単にこの歌の一貫性を掴ませてくれるだけではなく、「菅の根」の比喩をも想起させるものであると言える。抛り所のない時間はなんと長く思われることか、ということはこの比喩は伝えているのである¹⁰。

「菅の根」の直前に「もとな」が置かれているために一層はっきりと始まりも終わりもない時間の観念が生じている。すでに指摘したように、「菅の根」は枕詞であるが、枕詞は詩において頻繁に使われるものであり、当時の読者にはよく知られていたと考えられる。ここで歌い手は、枕詞に「もとな」を先行させることで、限りなく続く日々を伝えると同時に、報われることのない恋心、無為に過ごす人生、叶えられないことのない願いをも伝えている。

ようやく歌を翻訳する準備が整った。それは歌として翻訳するということである。つまり恋の相手である女性へのメッセージとして、彼女にこの耐えがたい不安に終わりをもたらしてほしいという気持ちを伝える歌として翻訳することなのである。

« Toi qui ne m'aimes pas et que j'aime d'un amour sans racine, suis-je condamné à t'aimer ainsi tous les jours de cet interminable printemps ? »

「私を恋してくれないおまえ。抛り所のない心で恋していれば¹¹、果てなく長き春の日を恋し続けることになるのか。」

第二の歌

「朝戸出乃 君之儀乎 曲不見而 長春日乎 戀八九良三」(1925 番歌、作者未詳、卷十 春相聞)

■中西進訳：「朝帰っていくあなたの姿を悲しさのあまりよく見なかったから、かえって長い春の一日を恋い暮らしてしまうのかな。」

« Quand tu es sorti ce matin, j'étais trop triste pour te regarder partir. Je ne t'en aimerai que davantage tout au long de cette longue journée de printemps.¹² »

この翻訳においては、中西氏は原文にはない幾つかの要素を付け加えている。とりわけ翻訳に現れた「悲しさのあまり」は、この女性歌人が、早朝に部屋から出て行く男の姿を眼で追う様子を伝えるものであり、そこでは彼女が悲しみから手で顔を覆い、泣いてさえいるかもしれない姿が想像できる。中西氏は離別の場面を演出しているのであり、「だからこうして」を意味する「かえって」という副詞表現を持ち込んでさえいる。歌い手は恋人に「直に会う」ことができないがために、春の日を一日中、一層強く恋すると確信していることが分かるのである。

■小学館訳：「朝戸出の君の姿をよく見ずに長い春日を恋い暮らすことか」

« Quand tu es sorti ce matin, je ne t'ai pas bien regardé. A cause de cela, je crois que je vais t'aimer pendant toute cette longue journée de printemps. »

この現代語訳のフランス語訳において、末尾の疑問の助詞「か」を翻訳するために、フランス語で「～だろうか」を意味する詠嘆的推量表現を用いている。さらに歌の後半部の助詞「を」は、継続を示す時間的状況を表す語と看做し「長い春日を暮らす」のように翻訳し、「恋ふ」という動詞の目的補語を「君を」にした。結果的にはフランス語においては「君を恋いしつづ長い春日を暮らすだろう」と翻訳した。また歌のほぼ真ん中に位置する「に」に着目し、これは前半部「君の姿をよく見ず」と後半の「君を恋いしつづ長い春日を暮らすだろう」とが、因果関係で結ばれていると解釈した。離れているにもかかわらず、相手をこれから何日ものあいだ恋続けることへの女性歌人の決心は、男が自分のもとにいるあいだに十分に恋心を伝えることができなかったことへの後悔から生じている。それは、より長くより深く恋心を伝えたかったのにできなかった、という後悔なのである。

■折口信夫訳：「朝帰るときに、門を出て行ったあの方の姿を、よく見送っておかなかったために、長い春の日を焦がれ暮らさねばならないか。こうして。」

« Quand tu es sorti ce matin, je ne t'ai même pas raccompagné jusqu'à la porte. Est-ce pour cela que je devrai me consumer d'amour pendant cette longue journée de printemps ? Me consumer à ce point-là ! »

ここでもまた、翻訳者は原文にはないいくつかの別の要素を付け加えている。例えば、まず「見る」に代えて「見送る」という動詞を使っている。さらに「恋ふ」の代わりに「焦がれる」を用いている。なお歌の末尾に何かを指示する語「こうして」という原文にはない言葉まで付け加えている。

本論の考える所は、この副詞的表現は動詞「焦がれる」を修飾し、意味は「こうして君を恋する」「これ

ほど強く」のように解釈でき、折口はこの女性歌人の胸中の言葉を訳出しているのである。この歌い手は戸口まで恋人を見送らなかったために、この強調が必要だったのだろう。ここに見られる過剰な訳は、折口の演出だと考えられる。つまり恋人を焦れながら「こうして」（それほど強く）恋人を抱きしめることができなかつたことに対する歌い手の後悔を伝えてもいる、ということである。歌の詠み手はそこまではっきりとは言葉に表していないが、「見送り」の場面だということとを考慮すると、「こうして」という語を吐くわえているのは、歌い手の抱く恋の強さを伝えるためだと考えられる。

このように折口は創意に富む翻訳を行っており、原文に躊躇なく自由な要素を加えているが、ここで注意してほしいのは、翻訳における表現も、原文と同じく読者に作用するということである。例えば、折口はこの歌の前半部を訳すにあたり、「ために」という表現で締めくくっており、歌の末尾に来る動詞を訳すにあたっては、「ねばならない」という言い回しを使っている。このように歌の前半部と後半部を因果関係によってはっきりと結びつけることで、歌い手が使っている理由「今朝あなたを戸口まで見送らなかったから」に対して、翻訳者折口が「ねばならない」といったように義務の形で結果を浮かび上がらせている。ここから、この歌のモチーフとは口実、つまり女性歌人が「恋せざるを得ない」「他にはどうしようもない」という観念を伝えることができるような口実であることが分かる。「せざるを得ない」恋の対象は、この歌の受け手である男であるにちがいない。ここで折口の翻訳の選択における基準を考えれば、彼が前半部の口実と後半部の心情表現との間に一種の客観性を設けていることがわかる。折口の翻訳を再びフランス語へと翻訳しようとする際に、この「客観性」を考慮しなければならない。

■訓読文：朝戸出の 君が姿を よく見ずて 長き春日を 恋ひや暮らさむ

「よく見ずて」という句は歌の中央に位置している。そうした位置にあるが故に、その前後に統辞的關係があることがわかる。その関係は、先に見た現代語訳のようにそれぞれの方法で表現されているが、どれも因果関係として結ばれている。「見ず」に現れた打ち消しには、恋人を戸口まで見送らなかったことの後悔が含まれている。またその一方で、女性歌人は、これから続く根の生えたように長い春の一日に向かってもいるのである。「恋ふ」の後に続く係助詞の「や」は、「恋する」ことへの疑念を伝えている。中西氏の翻訳においては、「かえって」という表現によって、歌い手が歌に込めた気持ち、つまり恋人を十分に恋することができなかつたために、長い春の日を一日中、一層強く恋するだろうという確信が伝えられているのである。

最終的な翻訳としては以下の通りとなった。

« Quand tu es sorti de chez moi ce matin, je ne t'ai pas vu franchir la porte. Je passerai toute cette journée de printemps à t'aimer encore et encore. »

「今朝あなたが出て行く時、戸口を出るあなたの姿を見なかつた。これからの長い春の日、あなたをずっと恋し続けるでしょう。」

第三の歌

「相不念 将有兒故 玉緒 長春日乎 念晩久」（1936 番歌、作者未詳、卷十 春相聞）

■中西進訳：「私を思ってくれないあの子なので、玉の緒のように長い春の一日中を、思い暮らすことよ。」

« Parce que c'est toi, même si tu ne m'aimes pas, je passerai ces longues journées printanières en pensant toujours à toi¹³. »

この歌においては、「玉の緒」という枕詞が目につく。それは「紐」を意味する「緒」と美しく大切なものを形容する語である「たま」とで構成される語であり、絹の紐を喚起し、長さ、継続、連続などを比喩的に表す。こうした観点から、その使用は、枕詞「菅の根」と近いと言えるであろう。ただしここで指摘しておきたいのは、「菅の根」が長さと同時に「堅固さ」を表すのに対し、「玉の緒」が長さに加えて「脆さ」を表すことである。

■小学館訳：「思ってくれていそうにない娘なのに（玉の緒の）長い春日を思い暮らすことか。」

« Bien que tu n'aies pas l'air de m'aimer, je vais quand même passer les journées du printemps en pensant toujours à toi. »

この翻訳を成す解釈の元となる考え方は、中西氏のそれとは異なる。先に見た因果関係（～なので）に代わって、ここでは対比関係（～なのに）が見られる。中西訳では、歌い手は相手の女性が自分を恋してくれないことを確信しているにもかかわらず、彼女だからこそ、恋い続けることを決心していることが分かる。この解釈に関して、小学館の翻訳者は「～していそうにない」という婉曲的な表現を導入している。「この娘は恋していないようだ」と歌い手は自問し、このように娘の内面を想像して、それでもなお恋し続けようと決意しているのである。歌い手の決意は、より知性的かつ理性的である。

最後に指摘しておきたいのは、この翻訳の末尾の言葉が「疑問的詠嘆」を意味する「か」であることである。フランス語の翻訳においては、この助詞を「それでもなお」といった副詞表現を用いることで翻訳した。原文の末尾に関しては後ほど見たいと思う。

■折口信夫訳：「私許りが片恋でいるらしいそのひとのために、長い春の日を思い暮らしていることよ。」

« J'ai bien l'impression que mon amour est à sens unique. Mais pour toi, je passerai toutes ces longues journées de printemps d'un cœur amoureux¹⁴. »

■訓読文：相思はず あるらむ子ゆゑ 玉の緒の 長き春日を 思ひ暮らさく

« Tu n'as pas l'air de m'aimer comme je t'aime. Mais pourrais-je me garder de penser à toi tout au long des beaux jours du printemps ? »

この歌においては、「あるらむ」という表現があり、この助動詞「らむ」は現在推量を表している。歌い手は自分を恋していないことが推し量られる相手の女性に恋を打ち明け、二句目を「ゆゑ」という語で締めくくっている。「君が恋してくれていないことが分かるので」と言った後、「暮らさく」という珍しい形で末部を結んでいる。この表現においては、自らに禁止を命ずるような形である「暮らさく」が使われており、後半部の意味は「この果てない春の日々に君を恋することをやめた方が良いのだろう」となる。

小学館の翻訳者は「暮らさく」の意味に関して解説を加えている。しかし翻訳自体には「暮らすことか」という言葉を当てている。この「か」はこれまで見た小学館の二つの翻訳にもあったのであるが、いずれの場合も「や」を翻訳する言葉として使われていた。ここでは「か」は疑問ではなく、おそらく「疑い」「ためらい」を意味するのかもしれない¹⁵。

ここで枕詞の意味する所を考えなければならない。歌い手がためらいを感じているのは、春とともに訪れた長い日の連続を考えてのことなのである。歌い手は自分の恋が片恋であることを痛感し、時間が経つにつれ、その苦しみが増すばかりであることを予感しているのである。結語の「暮らさく」の中には、この長い日あるいは、むしろこの長く終わりのない苦しみを前にしての歌い手の不安が表現されている。注意しないと、終ることなくこの苦しみが続いていくかもしれないので、この恋に踏み入らずに留まる方が賢明であるが、恋心にその賢明さは理解できるのだろうか。

第四の例：「1921 作者未詳 卷十 春相聞」

次の歌が、本論文の核心部であり、これまでの他の歌に関する分析は、この前段階であった。それでもやはり、これまでと同様の手順で考察を進めたいと思う。

■中西進訳：「ほんの少しだけあなたとお逢いして、菅の根のように長い春の日を恋い続けることよ。」

« Je t'ai rencontré juste un peu, et je continuerai de t'aimer pendant cette journée de printemps, longue comme une racine de *suga*. »

この歌の翻訳に関してはすでに別の論文で述べたので¹⁶、ここではさらに深く立ち入ることはしない。ひとつだけ指摘しておけば、今回の翻訳では格助詞「を」は時間的継続を示すものと看做しフランス語ではそれを「～の間」と言う語に移し替えたことである。

■小学館訳：「おぼろげに あの方を見て (菅の根の) 長い春日を 恋いつづけることよ。」

« Je t'ai à peine vu, mais je continuerai de t'aimer pendant toutes ces longues journées de printemps (longues comme une racine de *suga*). »

■折口信夫訳：「仄かにあの人に出逢うてみて、その為に、長い春の日を焦がれ続けていることだ。」

« Je t'ai à peine vu, et voilà que je me consume d'amour tout au long de cette journée de printemps. »

ここでもまた、彼は「その為に」という言い回しを用いているが、それをフランス語に訳すとき、「その時から」という意味をもつ語を用いた。フランス語においてこの語は、この歌の因果関係のニュアンスを含むからである。歌の前半で語られている恋の芽生えから始まって、その結果が進行形「焦がれ続けている」として現代語訳されている。歌い手にとって、春の日の間ずっと焦がれ続けているので、どれほどその出会いが濃いものであったかが想像できるのである。

■原文：不明 公乎相見而 菅根乃 長春日乎 孤悲渡鴨

■訓読文：おほほしく 君を相見て 菅の根の 長き春日を 孤悲わたるかも

「を」についての留意点¹⁷

まず、第一の例を思い出そう。

相思はぬ 妹をやもとな 昔の根の 長き春日を 思ひ暮らさむ

原文においては、助詞「を」が二カ所に現れる。一つ目は「妹」の後であり、この場合は動詞「思ふ」の目的補語を示している。二つ目は「春日」の後であり、この場合は動詞「暮らす」の継続を表す時間的狀況を示している。上で見た通り、三人の翻訳者は、それぞれ形は違えど、いずれの場合も元の構造を優先し、目的補語と時間的狀況を示す語とを区別し、訳し分けている。

次に、第二の例について再び検討しよう。

中西訳は以下の通りであった。

「朝帰っていくあなたの姿を悲しさのあまりよく見なかったから、かえって長い春の一日を恋い暮らしてしまうのかな。」

« Quand tu es sorti ce matin, j'étais trop triste pour te regarder partir. Je ne t'en aimerai que davantage tout au long de cette longue journée de printemps. »

この中西訳の仏語拙訳を日本語に直したものを念のため見ておこう。

「あなたが今朝出る時、あまりの悲しみのためにあなたが出て行く姿を見られなかった。だからこそ、この長い春の一日、あなたを一層恋し続けることだろう。」

日本語では、このように「あなた」が繰り返されると不自然であるが、フランス語では「恋ふ」の目的補語を必ず明示しなければならない。従って上の例では、動詞 « aimer » (恋ふ) の前にある代名詞 « t' » は「あなた」を示している。その結果、この表現は日常の言葉のように、分かりやすいが平凡なものになっている。ここで本考察の冒頭で提示した案を用いて、より詩的な表現を求めてみたい。

« Quand tu es sorti ce matin, j'étais trop triste pour te regarder partir. Je n'en aimerai que davantage cette longue journée de printemps. »

「あなたが今朝出る時、あまりの悲しみのためにあなたが出て行く姿を見られなかった。だからこそ一層、この長い春の日を恋し続けることにしましょう。」

前の訳と異なっている点は、後半の「あなたを」がなくなっていることくらいである。この訳を読んでも、日本語話者であれば、「あなたを」が暗示されていると考え、前の訳と全く変わらないものを感じるであろう。しかし、フランス語で表現されているのは、実は、「恋ふ」の目的補語が「この長い春の日」だということなのである。ここにフランス語と日本語の文法的差異がはっきりと見られる。日本語で時間的継続を表していた「を」を、フランス語では « aimer » (恋ふ) の目的補語として表現した。しかし、それをもう一度日本語に表現し直そうとすると、その目的補語の「を」は自然に「時間的狀況」の「を」として捉えられるのである。これは、大変興味深いことである。

次に折口訳について考えよう。

「朝帰るときに、門を出て行ったあの方の姿を、よく見送っておかなかったために、長い春の日を焦がれ暮らさねばならないか。こうして。」

先に述べたように、折口は「ために」「ねばならない」という表現を用いて、因果関係を表わしており、

そこから一種の客観性が生じている。しかしこの客観性は、詩人でもある翻訳者折口の工夫なのである。「恋するより他にどうしようもない」という歌い手の想いを義務的な表現を用い、「口実」を浮かび上がらせつつ、表現するためのものである。まず、この現代語訳を逐語的にフランス語に訳してみよう。

« Je ne t'ai pas regardé partir ce matin. Est-ce pour cela que je devrai t'aimer toute la journée ? »

「今朝あなたが出て行くのを見なかった。それゆえに、私は一日中あなたを恋しなければならないのでしょうか。」

この訳でもまた、「あなた」を明示することで平凡な表現になるだけでなく、歌い手の口実と心に抱く本当の希望との間にあるはずの一筋の道は見えなくなってしまう。折口の詩的工夫はフランス語にそのまま訳しても効果がないため、それに代わる工夫を見出さなければならない。ここで、「どうしようもない」という歌い手の本当の心情を表現するため、「焦がれ暮らす」を « me consumer d'amour » 「恋に焦がれる」（時間とともにろうそくの芯が燃えてゆくようなイメージを喚起する表現）を用い、次のような訳を試みた。

« Quand tu es sorti ce matin, je ne t'ai même pas raccompagné jusqu'à la porte. Est-ce pour cela que je devrai me consumer d'amour pendant cette longue journée de printemps ? Me consumer à ce point-là ! »

ここでは、「se consumer d'amour」 「恋に焦がれる」という心情表現は他動詞ではないため、「あなた」を明示する必要はなくなっている。

第三の歌に移ろう。

相思はず あるらむ子ゆゑ 玉の緒の 長き春日を 思ひ暮らさく

この歌では、これまでに見たように、歌い手はこれから来る苦しみを予感している。眼前には残酷なまでに自分に無関心なままである女性がいれば、同じく過酷な日々も待ち受けているのである。ここで再び折口訳を参照したい。

「私許りが片恋でいるらしいそのひとのために、長い春の日を思い暮らしていることよ。」

実際、この現代語訳をフランス語に訳そうとすると、文法的な観点から一つの障壁が現れる。「そのひとのために」と折口は書いているが、「～のために」に相当する表現は、フランス語では「帰属の補語」と呼ばれる。ここに問題が生じる。フランス語ではひとつの文中で、同一のものが「帰属の補語」と「目的補語」とを兼任することはできない。従って、「そのひと」は帰属の補語として訳すや否や、目的補語として扱うことは不可能になる。また折口の翻訳における「を思い」の「を」は継続を示す時間的狀況を表す格助詞と看做さねばならないが、その上でフランス語訳を考えると、「思う」の目的補語に相当するものが不足する。そこで「思う」「恋する」といった動詞の代わりに「過ごす」という動詞を採用し、それによって不足する「恋心」を副詞句 « d'un cœur amoureux » として新たに付け加えた。

« J'ai bien l'impression que mon amour est à sens unique. Mais pour toi, je passerai toutes ces longues journées de printemps d'un cœur amoureux. »

この仏語訳を日本語に戻しておくと以下の通りになる。

「私の恋は片恋なのでしょう。でも君を思って、この長い春の日を過ごすことでしょう。」

結 論

四番目の例、つまり本論の対象であった歌の翻訳の基準を判断する前に、次の点を振り返ってみよう。助詞「を」に関する辞書の定義が、「継続を示す時間的状况」であるにせよ「目的補語」であるにせよ、以上に見た全ての翻訳において「時間的状况」として解釈されていた¹⁸。そこから、和歌に現われた「孤悲わたる」「思い暮らす」と言った動詞の行為の継続を、現代語訳者たちは表現していることが分かる。また、日本語においては主語および目的補語は必ずしも明記される必要がないことを考慮すれば、「恋ふ」「思ふ」の対象に相当するものは、日本語話者には明らかであろう。しかし、フランス語ではその対象を省略することは不可能であり、文法上で伝える必要がある。

一般的に、日本語の文を仏訳する時には、動詞の目的補語が何であるかを「を」をヒントに探す。しかし、本考察の例では、「(春日)を」は動詞「恋ふ」や「思ふ」の目的補語ではないため、他に恋の対象を探さなくてはならない。それが「君」や「妹」であろうことは容易に想像できるが、そこで「君を恋ふ」などと訳すと、「君」の繰り返しにより平凡な翻訳になってしまう。より詩的な表現を見出すために、助詞「を」の持つ「時間的状况」と「目的補語」の二つの意味に着目し、ひとつの試みとして、後者の意味を和歌の表現中に認められないかどうか考察したい。上述した通り、フランス語の「目的補語」を再び日本語に訳すと、自然に「時間的状况」の表現として理解される。このような現象から、問題の和歌の翻訳においても同様の工夫を施してみたい。そして、詩というものの観点から見た際に、こうした解釈が妥当なものであるか検討しよう。

「春の日を恋する」と「春の一日中恋をする」との間の相違は、単に統辞的な要素、あるいは言語学的要素によるだけでなく、日本語の構造の問題、あるいはフランス語の要請にもよるのである。解決できない問いに無理矢理結論づけることが本考察の目的であるわけではなく、むしろこの二つの解釈の妥協点を見出すことこそが不可欠なのだ。この妥協点を探るために、本考察が基準とするのは、歌の作用、つまり歌が歌としてもつ価値をめぐらるものである。

こうした観点から冒頭で取り上げた二つの翻訳案をもう一度見てみよう。

1) 君の眼差しに浸されたので、菅の根のように長いこの春の日を、一日中（ひたすらに）君を恋い続けることでしょう。

この歌い手は物憂げな女性として現れている。彼女の抱く恋の情熱は、ろうそくの炎のごとく、自らのうちに焦がれている。この恋の魂は、まったくもって内面化されたものである。

2) 君の眼差しに浸されたので、菅の根のように長いこの春の日を恋焦がれ続けることでしょう。

ここでは、逢瀬が歌い手の心に深い印象をもたらし、歌自体にそれが刻まれており、恋の体験が前者より完全に復元されているように思われる。恋心は物憂い願望の中に澱むことはなく、新たな対象の上で弾んでいるのである。時間が経ち、さらにいえばこの心地よい日の瞬間ごとに、恋を求める心に癒しがもたらされ、それは喜びと軽やかさに満たされた精神へと昇華する。生きることの幸福は、「菅の根」に変貌し表現され、その比喩がもつ美的価値を明確に表している。

恋人たちを結びつける絆は歌の弾力となっており、歌い手が過ごしている時間の流れが創造の動機でありモチーフになっているのである。この「根」によって、新しい世界の土台が垣間見える。現実の世界は、美、光、熱、心地よさに満ちているにもかかわらず、恋人と眼差しを交わしたことで、この女性には新たな未知の世界が開かれたのである。

以上の理由から、最終的な翻訳においては後者の解釈を選択する。また、夜に起きた出来事と、その後の日に行われつつある成就との間に因果関係を持ち込もうと考えた。夜の出来事の結果を実際に訳に反映させるために、次のような翻訳を採用した。

« Tout imprégnée de ton regard, je me consume d'amour pour cette journée de printemps, longue comme une longue racine de *suga*. »

「君の眼差しに浸されて、長い菅の根のように長いこの春の日をずっと、恋焦がれていることでしょう。」

翻訳：野田農

参考文献

- 1 「おほほしく 君を相見て」を「君の眼差しに浸されたので」と翻訳することについては、すでに『萬葉集』における恋の表現について一翻訳を試みて（上代文学学会大会にて発表。於：高岡市生涯学習センター、2015年5月17日）の中で詳しく扱った。「相」という表現に相互性の意味を認めると、「私が見ている君」が同時に「私を見つめている」という解釈ができる。歌に明示されているのは前者だけであるが、相互性が鏡のように働いているのならば、相手の眼差しが歌い手自身の方へと戻ってくるのが暗示される。そして、自身に向けられた相手の眼差しの印象こそが歌い手の感情を表すものと考え、それを翻訳に表現しようとした。
- 2 日本語の自動詞他動詞の区別とフランス語におけるそれとは必ずしも一致するわけではない。なぜならフランス語においては自動詞という概念は存在しないからである。フランス語でいう他動詞とは、かならず目的語を伴う動詞であり、さらにいえば目的語がなければその動詞が示す意味内容は完璧にはならない動詞のことである。そうでない動詞は「非-他動詞」と呼ばれる。これはあくまでフランス語ひいては西洋諸語における文法的構造の観点からの捉え方である。ここで強調しておきたいのは、両言語における主体と客体の間の線引きが多かれ少なかれ異なっているということである。例えばフランス語では「私は起きる」ということを表現するときに « Je me réveille »（あえて文字通り日本語に訳せば「私は自分を起こす」）という表現を用いることが普通であり、ここには動詞 « réveiller » の目的語にあたる « me » が現れている。日本語では「起きる」という場合には目的語にあたる表現は必要ない。こうした例にも両言語の違いがはっきり現れていると言えるだろう（翻訳者註）。
- 3 動詞「相見る」の「相」については、行為の相互性の意味を必ずしも明確に持たず、ここでは直前に「君を」とあるため、文法的に見ても単に「相手を見て」という意味になる可能性がある、という解釈もある。本論における解釈については、『萬葉集』における恋の表現について一翻訳を試みて（平成27年度上代文学学会大会）の中で詳しく説明したので、そちらを参照のこと。
- 4 この点に関して、同志社大学名誉教授であり、万葉集の専門家である駒木敏氏にご協力を頂いたことに、この場を借りて厚く御礼申し上げたい。また、本考察に関して駒木氏と西澤一光氏に貴重なご意見を頂いたことにも、心より御礼申し上げたい。
- 5 問題の万葉集 1921 番歌は、拙論「恋を名指す表現「相見る」-万葉集からの例に基づいて」の中で取り上げた。『アワの茎、鷺の脚—東洋の詩を読み、訳す』第二巻、ジュリー・ブロック編、CNRS、パリ、119-134、2013。
- 6 一般に、注釈は古いものから時代順に挙げるべきであるが、ここでは論展開の関係から、時代を遡る形で注釈を挙げ、比較する。
- 7 『全訳古語辞典』、旺文社、1990年、「もとな」の項を参照した。
- 8 青木氏は例えば、こう述べている。「逢った場合も、(略) 逢ったあとの別れの場合も、対象を獲得し得た歓喜やこれを喪失した悲哀そのものより、対象との結びつきをあくまで希求する心情の湧出に終始するものに他ならない。この心情の生まれるもっとも直截で純粹な契機が、(一) 逢いたい人に逢えない状況にある歌で、これが万葉の「恋」歌の圧倒的多数を占めているのである。」（青木生子、「万葉の「恋」の実態と様相—日本文化の基層—」、『東西の恋愛文芸』、高等研報告書、0501号所収、102頁、2006。）
- 9 より詳しいところでは、山田孝雄『「母等奈」考』に「「もと」という名詞と形容詞「なし」の語幹「な」との合成語」（『萬葉集考叢』、宝文館、1955年、272頁）とある。

¹⁰ 『全訳古語辞典』の「よりどころ」の項を参照のこと。ここでは第一の意味として「頼る所」「頼りとして身を寄せる所」といった意味があり、そこでは『源氏物語』の桐壺からの例が引かれている。「とりたてて、はかばかしき後ろ身しなければ、事あるときは、なほよりどころなく心細げなり」。

¹¹ この部分のもう一つの訳として「あてもない心で恋していれば」も考えられる。以下、後半翻訳者大山注：このフランス語翻訳の意味は、「私に恋してくれないおまえ。私は拠り所のない心でおまえに恋しているのだが、こうして、果てなく長き春の日を恋し続けることになるのか。」であり、「恋していれば」は条件を示すものではない。ここはむしろ、あてもない心で恋する歌い手の状態を表している。

¹² この中西訳の仏語拙訳の日本語訳を念のため見ておこう。「あなたが今朝出る時、あまりの悲しみのためにあなたが出て行く姿を見られなかった。だからこそ、この長い春の一日、あなたを一層恋し続けることだろう。」

¹³ この中西訳の仏語拙訳の日本語訳を念のため見ておこう。「私を恋してくれない君だから、この長い春の日を、君をずっと思いつづけるでしょう。」

¹⁴ 念のため、折口訳の仏語翻訳を日本語に戻しておくこと以下の通りになる。「私の恋は片恋なのでしょう。でも君を思っ、この長い春の日を過ごすことでしょう。」

¹⁵ 「暮らさく」は「暮らす」のク語法であり、「暮らすこと」の意味である（動詞に古代語の名詞「あく（＝こと）」が接続している）。ここでは、「思ひ暮らさく」によって体言止めとなり、詠嘆的終止法となっている。フランス語訳では、「*pourrais-je me garder de penser à toi?*」のように疑問の形をとっているが、これは反語的なものであり、疑問ではなく強い肯定を表す。そのため、フランス語訳を日本語へ再翻訳すると「君を思っ（この長い春の日を）過ごすことでしょう」と肯定形になる。

¹⁶ 「翻訳の重要な基準としての美学的観点—八世紀和歌二首を現代語訳、フランス語訳と比較して」、『翻訳を通して何を伝えるべきか』エヴ・ド＝ダンピエール編、フランス比較文学会第37回大会報告書、250-256、2014。

（<http://vox-poetica.com/sflgc/actes/traduction/6.1.%20Brock.pdf>）。また、その内容を『萬葉集』における恋の表現について—翻訳を試みて」（平成27年度上代文学会大会）にまとめたので、そちらを参照のこと。

¹⁷ 以下の考察の翻訳は大山明子氏による。

¹⁸ この「を」の二つの機能こそがまさに、「思ひ渡る」「恋ひ暮らす」といった複合動詞の組合せを可能にするものではないだろうか。こうした二つの意味を持つ格助詞の「を」が解釈の曖昧さを招き、本考察はそれを出発点としている。